

「圓流寺図」「月照寺惣御廟図」に描かれたお殿様の寺社参拝ルート

1. ことの始まり

令和2年の11月初旬から、松江城山内にある松江神社の歴史を調べることとなった。松江城調査研究室で行った松江神社建物調査の報告書に掲載する「松江神社の歴史」を執筆するためだったが、ことの始まりは、藤井松江城調査研究係長から11月初旬に執筆項目と関係資料、報告書体裁例を渡され、締め切りは「6頁くらいを12月末まで大丈夫です」、というものだった。

松平直政（松江松平家初代藩主）を主祭神とし、徳川家康（東照宮）を合祀神とした松江神社の創建はやや複雑である。現在、松江市立女子高等学校が建つ松江市西尾町の丘陵には、寛永5年（1628）、堀尾忠晴によって徳川家康を祀る東照宮が建立され、その別当寺として照高山圓流寺が置かれた。圓流寺は徳川家光ら歴代将軍の位牌所でもあった。藩政期には松江藩内でも有数の高い格式を持つ社寺だったが、明治維新後は藩の庇護を失い、神仏分離も進み衰退していく。一方、藩政期には須衛都久神社（松江市西茶町）に祀られていた松平直政の御霊が、明治維新後は合祭が禁じられたために、明治10年（1877）に西川津村樂山に神社建物を建て、直政の御霊を遷座し、新たな神社は地名により「樂山神社」と称された。その後、東照宮は、維持保存が難しくなったため、明治31年（1898）11月に樂山神社に合祀された。さらに、明治32年（1899）に樂山神社を松江城山内に移転する議が起こったことから、東照宮の旧社殿を松江城山内に移築して神社の社殿とし、樂山神社をそこに遷宮し、その折、神社名を「松江神社」と改称した、という経緯があった。この「松江神社の歴史」を書いてくれというのが、藤井係長からのミッションだった。

実は、しばらく前に話を聞いたときには私も簡単に考え、安請け合いをしていた。というのも、かつて岡崎雄二郎氏、西尾克己氏らと東照宮、圓流寺、松江神社、鰐淵寺等の石造物調査を行い、『松江市歴史叢書』2（2010）にまとめており、松江神社創建に至る概略は知っていたつもりだったので、中原健次先生が『朝酌郷土誌』（朝酌郷土誌編集委員会2001）に執筆された東照宮・圓流寺の歴史をまとめればよいと考えていたからだ。また、藤井係長から手渡された資料には、松江神社建物調査に先立ち、松江市まちづくり文化財課で集めた写真類や刊本コピー、現地調査の記

録があり、それらを組み合わせれば、すぐに出来ると考えていた。しかし、取り掛かってみると、「松江神社の歴史」の深みに入り込んでしまったのである。

「松江神社の歴史」の深みは、明治維新後の様々な動きとともに、藩政期には高い格式を持った東照宮・圓流寺の実情がほとんど明らかにされていないことにあった。岡崎雄二郎氏、西尾克己氏、山根克彦氏、新庄正典氏、松尾澄美氏、小山祥子氏、高橋真千子氏、岩根栄子氏より、資料の提供や貴重なご教示をいただき、とりわけ、小山祥子氏（史料調査課主任）、高橋真千子氏（史料調査課歴史史料専門調査員）からは松江市史編纂事業により収集された史料などの中から、新たな情報を探し出し提供いただいた。約束の原稿も、中途半端ながら何とか12月25日には藤井係長に提出し、報告書編集者である奈良文化財研究所に送ってもらった。頁数は予定の約4倍近くに膨らんでいたが、実際は深みの入口に立っただけである。藩政期の東照宮・圓流寺の実態解明は、西尾地区・市成地区周辺の現地調査や鰐淵寺の文献史料調査、松江市史編纂事業で調査された文献史料の再点検など、今後さらに追及していく必要があり、移転建物、伝来史料の保存・追加調査も重要な課題であると痛感した次第である。

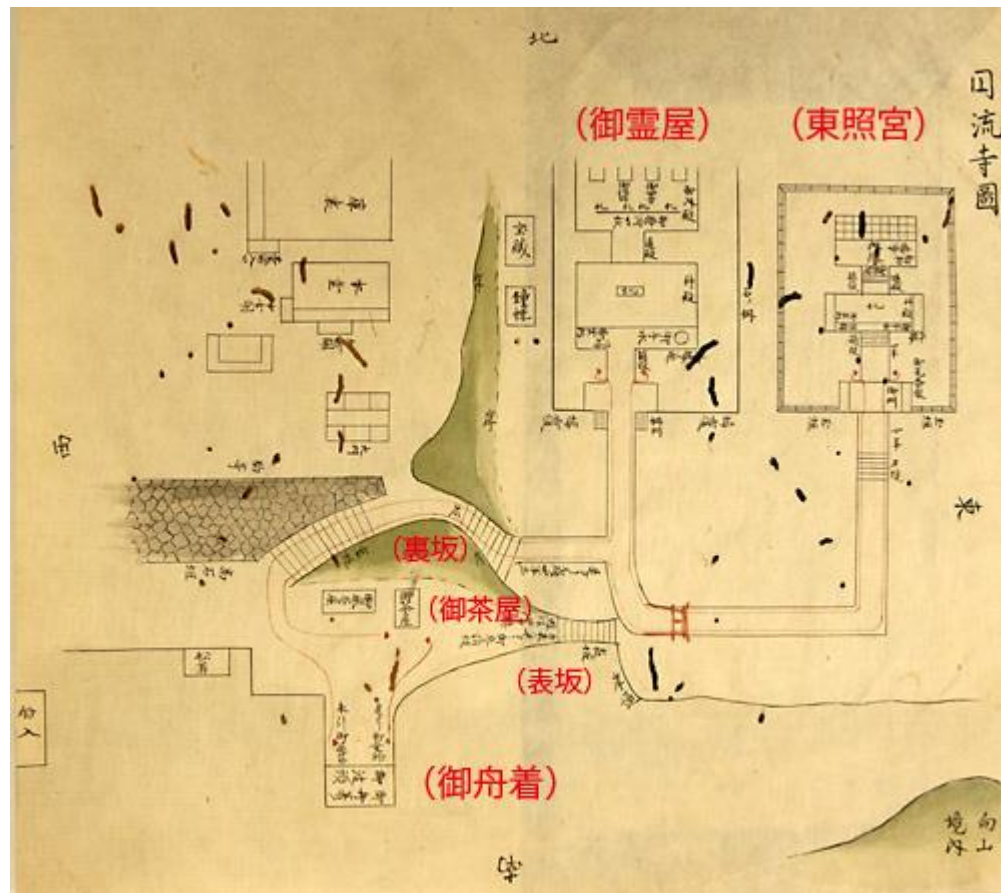
さて、原稿を書き進める中で、平成22年（2010）に史料編纂室で調査し寄贈を受けた大野家文書「寺社図」（松江歴史館蔵）のうち、「圓流寺図」についても紹介することとなった。図を見ていくと、図中の朱線が東照宮と御霊屋を廻るように引かれており、参拝順路と気づいたが、図中には「御乗物」「御舟着」という記述もあり、「圓流寺図」は藩主の公式参拝に備えて作成された図と考えるようになった。このことを小山祥子氏に話すと、同じ大野家文書に「月照寺惣御廟図」と題した朱線と彩色が認められる類似の絵図があると教えてもらった。史料紹介に至るいきさつが長くなったが、本コラムでは、「圓流寺図」「月照寺惣御廟図」より、松江藩主の公式寺社参拝の一端について紹介したい。

2. 圓流寺図（大野家文書）

「圓流寺図」【図1】は、東照宮、圓流寺の絵図で、境内の建物、参道、藩主（或いは松平家一族など）の船が着く御舟着周辺などの詳細な図に、朱線の参拝順路が引かれている。図では、藩主用の船着を「御舟着」と表記し、同図にある「舩着」「船入」と区別している。御舟着には、「御舟着ノ御波頭」と記された区画とともに、「是ヨリ御乗物」「朱引御通筋」と記されており、参拝順路は「是ヨリ御乗物」側から始まると考えられ

る。この図によれば、藩主は御乗物を用い、御舟着から御茶屋に寄り、裏坂をのぼり、先ず図右側の東照宮、次にその左の御霊屋に参拝し、再び裏坂をくだり、御舟着に戻る、と確認できる。

現在も石段が残る「表坂」には、「古来ハ是ヨリ御参詣被遊候由申伝」と記されており、この絵図が作成された頃には、女坂とも呼ばれる「裏坂」が藩主の参拝道となり、男坂とも呼ばれる急な石段の「表坂」は利用されていなかったことが分かる。



【図1】「圓流寺図」（大野家文書）に赤字加筆

なお、『松江市誌』（1941）には、次のような藩主参拝の様子が記されている。

「東照宮の祭日は、毎年四月十七日にて藩主在国なれば必ず直参するの例であった。其の時は藩主は二紺三白の幕を打廻した十二挺立の船に乗り、船頭は上はだんどう下は水玉を染め抜きたる着眼にて、静かに櫓を操り、当所の船入より上陸し、坂下の茶屋に暫時休憩し、緋網代六人肩籠で参拝し、其の行列は次の如し。（後略）」
（第2編第2章8.仏寺、1449頁）

御舟着（船入）上陸後の『松江市誌』の記述と、「圓流寺図」が示す「御乗物」の記述や、朱線が示す「御茶屋」への立ち寄りは一貫しており、藩主は参拝にあたり、「御乗物」（籠）で移動したと思われる。「御茶屋」は、「照高山圓流寺差出帳」（米村家文書）では「灘御装束所」とあり、休憩のためだけでなく装束を整えるために「御茶屋」へ立ち寄るのかもしれない。このように図を見ると、「朱引御通筋」とある朱線は、「御乗物」（籠）での移動区間を示していると考えられ、御茶屋前、東照宮拝殿前、御霊屋拝殿前

で一度朱線が途切れているのは、その場で籠が停め置かれ、藩主はいったん籠を離れるためと理解できる。また、朱線の両端には矢印が付され、特に東照宮、御霊屋前では進行方向を変えるような曲線が描かれているが、これは籠を置く向きを示しているのではなかろうか。

東照宮の拝殿、内殿には、「住持御案内」「奉幣住持」「御寮附」という藩主の参拝にかかわる注記があり、「箱段」「御手水」「机」などの設えも記されている。御霊屋の拝殿と御内殿には、「住持御案内」「御寮附四枚」「御四方御位牌」、位牌らしき四つの表記など、藩主の参拝にかかわる注記があり、「箱段」「御手水」「机」などの設えも記されている。

「圓流寺図」に描写年や実際の作成年は記されていないが、図中の御霊屋御内殿には「御四方」「御位牌」とある。東照宮は徳川家康（初代）を祀り、御霊屋は家光（3代）・家綱（4代）・綱吉（5代）・吉宗（8代）・家治（10代）・家斉（11代）・家定（13代）の位牌所であった。残る秀忠（2代）・家宣（6代）・家継（7代）・家重（9代）・家慶（12代）・家茂（14代）の位牌所は浄土宗誓願寺（松江市寺町）であり、徳川家霊廟である江戸の天台宗寛永寺と浄土宗増上寺に対応していた。つまり、図に記された「御四方」「御位牌」を徳川家光・家綱・綱吉・吉宗の位牌のことと考えれば、「圓流寺図」は吉宗が亡くなった宝暦元年（1751）から、次に祀られる徳川家治が亡くなる天明6年（1786）の間頃に描写されたものと推定できる。該当時期の藩主は、六代宗衍（在任：享保16年[1731]-明和4年[1767]、天明2年没）、あるいは七代治郷（在任：明和4年-文化3年[1806]、文政元年没）である。

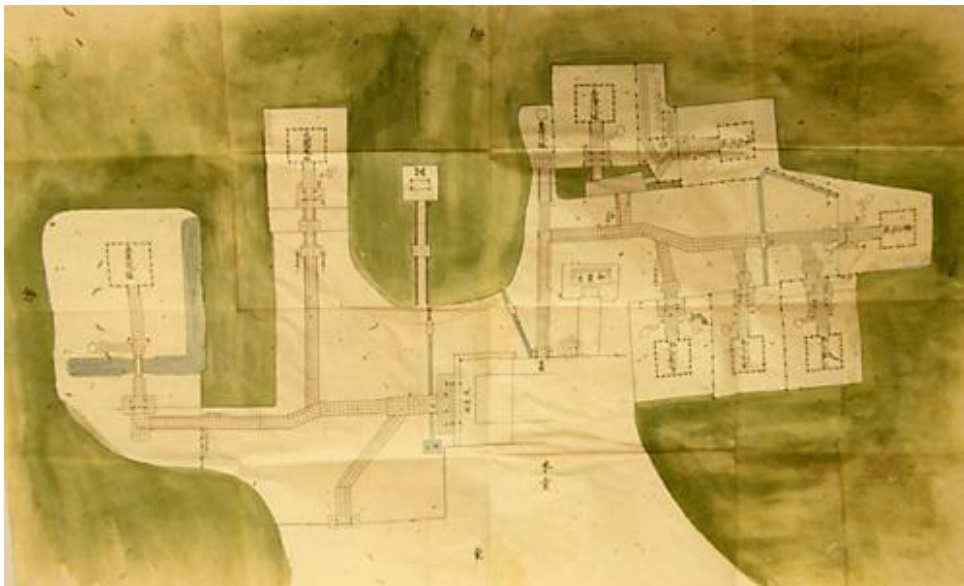
3. 月照寺惣御廟図（大野家文書）

「月照寺惣御廟図」【図2-1】は、松江松平家の廟所である月照寺の絵図で、歴代藩主の廟所、参道、建物などの詳細な図に、朱線の参拝順路が引かれている。「圓流寺図」と同様、大野家文書の一つで、藩主（或いは松平家一族）の参拝に伴い作成された図面と思われる。「月照寺惣御廟図」と書かれた袋に折りたたんで入れられている。

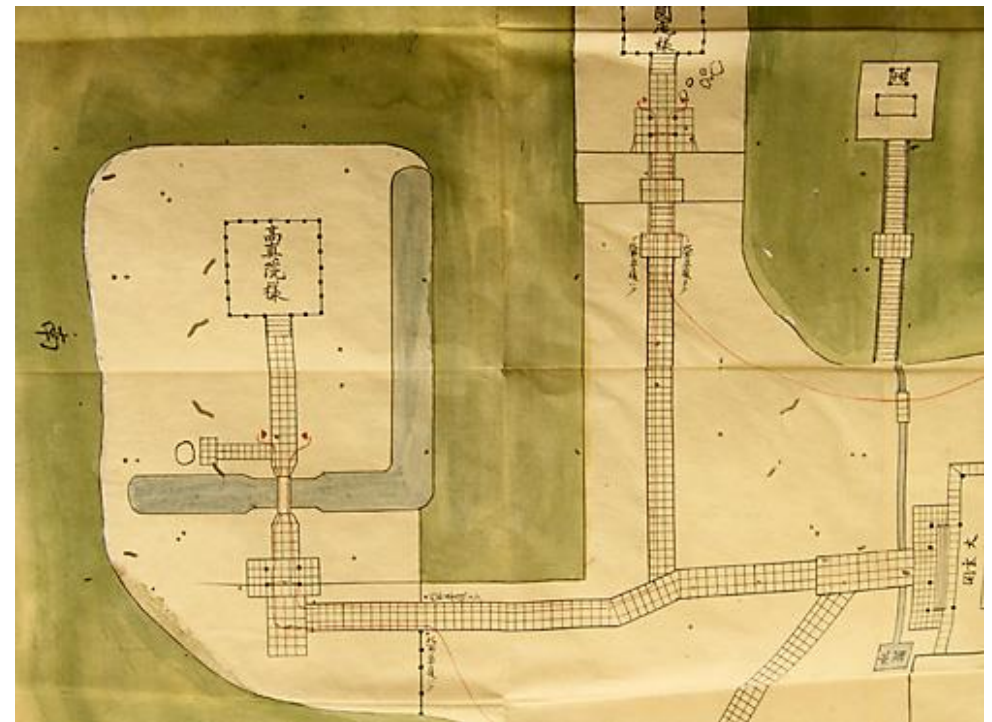
朱線の一端は「高真院様」（直政廟）付近の参道脇から始まっており、参拝順は松江松平家初代藩主直政廟からである。「圓流寺図」の朱線は、「御乗物」（籠）での移動区間と考えられることから、「月照寺惣御廟図」の朱線も「御乗物」（籠）での移動区間と考えると、朱線が石敷きの参

道から外れて引かれていることも頷ける。朱線を追うと、高真院廟門の手前で石敷きの参道に至り、そこに朱点を付して「此所草履ハク」と記されている。朱線は廟門を通り、水堀に架かる小橋を通り、蹲（つくばい）近くで一旦止まっている。「高真院様」（直政廟）前で藩主は籠を降り、参拝の後、ふたたび「御乗物」（籠）に乗って移動したと理解できる。次の参拝に向かう途中、草履を履いた地点に、朱点を付して「此所草履又ク」の記述がある。

初代直政廟の次に向かうのは、「大圓庵様」（七代藩主治郷廟）である。廟門前の石段手前に参道より幅広な石敷きがあり、往きに朱点を付して「此所草履ハク」、参拝後にも朱点を付して「此所草履又ク」の記述がある【図 2-2】。



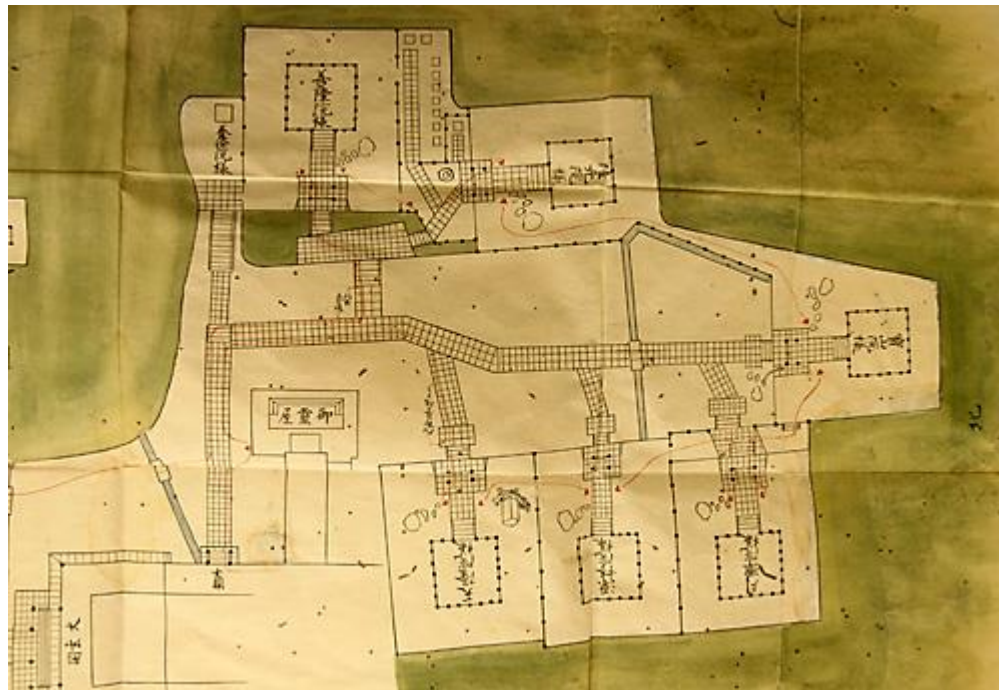
【図 2-1】「月照寺惣御廟図」（大野家文書）全図



【図 2-2】「月照寺惣御廟図」部分図 1（直政・治郷廟）

次に向かうのは、「善隆院様」（五代藩主宣維廟）である。「大圓庵様」（治郷廟）での参拝を終えると、石敷きの参道を外れ、「鎮守」前を通過し、再び石敷きの参道に至り、「善隆院様」（宣維廟）に到着する。廟門に至る石段手前に「此所草履ハク」の記述があるが、その後「此所草履又ク」の記述があるのは、最後の「天隆院様」（六代藩主宗衍廟）での参拝を終えた地点である。

「善隆院様」（宣維廟）での参拝を終えると、朱線は本来の参拝路ではなく、最短距離で「隆元院様」（三代藩主綱近廟）、「宝山院様」（二代藩主綱隆廟）、「月潭院様」（八代藩主斉恒廟）、「源林院様」（四代藩主吉透廟）、「天隆院様」（六代藩主宗衍廟）と引かれている。六代宗衍廟での参拝を終え、草履を脱ぐと、朱線は御霊屋に近寄った後、最後は本堂玄関に入り終わっている【図 2-3】。



「月照寺惣御廟図」に描写年や実際の作成年は記されていないが、図中に描かれた廟所は初代直政廟から八代斉恒廟までで、九代藩主斉貴（直指庵）の廟は描かれていない。つまり、この絵図は八代斉恒（月潭院）が亡くなる文政5年（1822）から、九代斉貴（斉斎）が亡くなる文久3年（1863）の間頃に描写されたものと推定できる。該当時期の藩主は、斉貴あるいは十代定安（在任：嘉永6年[1853]-明治2年[1869]）である。

【図 2-3】「月照寺惣御廟図」部分図 2（吉透～宗衍廟）

4. 藩主の公式行事に備えて作成された絵図面のおもしろさ

さて、藩主（或いは松平家一族）の公式寺社参拝に伴い作成されたと思われる絵図 2 枚を紹介した。比較すると、図中に引かれた朱線の描き方や彩色は類似している。いずれの朱線も籠での移動を示していると考えられ、朱線の両端には籠の向きを示すような矢印が付してある。朱線が参拝する場所の前で途切れているのは、その場で籠が停め置かれ、藩主はいったん籠を離れるためと理解できる。しかし、細かく見ると、「圓流寺図」には東照宮、御霊屋内での参拝関連の設えが細かく記入されているが、「月照寺惣御廟図」には各廟前での参拝関連の注記はない。また、「圓流寺図」に比べると、「月照寺惣御廟図」は石段の表現、石敷き参道、廟門・建物の柱位置、玉垣等の柱位置など、描写が詳細である。両絵図とも実際の作成年代（写しや改定を含め）は分からないが、描写年代（推定）の違いが細かい描写の違いに反映しているのかもしれない。

「列士録」によれば、「圓流寺図」「月照寺惣御廟図」を所持した大野家は、家老仕置役を勤める人材を代々輩出しており、藩主の寺社参拝にも携っていたと考えられる。それぞれの絵図をいつ大野家が所持したかは分からないが、推定描写年代（「圓流寺図」宝暦元年[1751]-天明 6 年[1786]、「月照寺惣御廟図」文政 5 年[1822]-文久 3 年[1863]）からすると、該当する時期の当主は、三代目大野舎人（宝暦 5 年[1755]家督相続）、四代目大野多宮（寛政 5 年[1792]相続）、五代目大野舎人（寛政 9 年[1797]相続）、六代目大野■[雁垂に光]之助（安政 5 年[1858]相続）であり、大野家でも四代に亘っていることが分かる。藩主不在時の参拝は代参によるが、これらの絵図を所持した大野家当主も代参を勤めたのかもしれない。

なお、「圓流寺図」は、「寺社図」の標題を持つ折本中の一絵図で、今回紹介できなかったが、「寺社図」には、「圓流寺図」とともに「月照寺」、「天倫寺」、「誓願寺図」、「慈雲寺図」、「末次神社図」（「文化四丁卯年致見分候」とある）、「照牀八幡両社図」、「白瀧天神社図」、「伊勢宮之図」、「白瀧社図」、「春日宇賀氷川三社図」（「文化四丁卯年四月廿五日見分之上改之」とある）、「愛宕山王社図」と題した寺社図が描かれている。彩色を施さない建物中心の平面図ではあるものの、各寺社図にも移動ルートを示す朱線や参拝に備えての様々な注記が付されており、おもしろい。これらの図も松江藩主の寺社参拝の一端を明らかにできるものとして、機会があれば詳しく紹介したい。藩主の公式行事での移動ルートと行事に付随する設えは家臣たちにとっての重要事項で、松江城天守内での移動ルートを朱書きの畳敷きで示した「御天守上ヨリ下迄地絵図面」（月照寺蔵：別編「松江城」に掲載）なども残されている。そのつもりで見えていくと、藩主が赴く公式行事に備えて作成された絵図面がいろいろと見つかりそうで、それだけを集成してもおもしろいと思う。

5. おわりに

今回のコラムは、松江神社の歴史を調べたことがきっかけで、11年ほど前の2010年に調査・撮影された2枚の絵図を紹介したものである（撮影日は2010年1月28日）。所狭しと積まれた史料群を所有者のご厚意で寄贈いただき、当時の史料編纂室スタッフとともにご自宅から運び出したことを、その頃の情景とともに懐かしく思い出した。

この10年余り、精力的に収集された地域の歴史史料（古文書等）は、松江市史の編纂と地域史研究にとって有益な役割を果たし、史料保存の観点からも、放っておくと失われていたであろう貴重な史料も数多く寄贈・寄託していただいた。関係者の努力により、市史編纂事業に伴う史料調査では調査目録を作成し、史料撮影が計画的に行われ、調査データは史料調査課で厳重に保管されている。松江市史編纂事業後を見据える史料調査課では、引き続き歴史史料（古文書等）の収集・保存を進めているが、収集した歴史史料の公開・活用は今後の大切な課題である。

（松江市歴史まちづくり部次長／稲田信／令和3年1月20日記）